

助産教育の学内演習における基礎・母性看護技術演習の必要性 - 学生への質問紙調査による学内演習の評価 -

中田かおり 佐々木和子

国立看護大学校；〒204-8575 東京都清瀬市梅園 1-2-1
nakadak@adm.ncn.ac.jp

The Students' Needs in Learning Fundamental and Maternity Nursing Skills at the Clinical Laboratory in Midwifery Education

Kaori Nakada Kazuko Sasaki

National College of Nursing, Japan ; 1-2-1 Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒204-8575, Japan

【Abstract】 The purpose of this paper is to discuss the students' needs in learning fundamental and maternity nursing skills at the clinical laboratory session in midwifery education. Nine of all midwifery graduates voluntarily participated in answering the questionnaires to evaluate the needs and the appropriateness of the laboratory session. Eight participants said that the contents of the clinical laboratory were "appropriate". Seven felt that the allotted time of practice session was appropriate for the selected fundamental skills that include: "catheterization", "shaving", "wearing a sterilized gown and gloves", "handling sterilized materials", "insertion of an intravenous catheter", "filling an injection syringe", and "handling an intravenous infusion pump". With regard to maternity nursing skills, any formal practice session or test was not provided for the year. However, seven participants revealed that formal preparation for practicing maternity nursing skills is needed prior to entering midwifery clinical placements. Those skills include: "abdominal palpation", "fetal monitoring", "assessment of postpartum fundus and lochia", "breast care", "newborn assessment skills", and "giving a baby bath". Other than the above skills, two participants suggested that using a case study may be helpful for them integrating cognitive and psychomotor skills. This small survey illuminated the midwifery students' needs for formal preparation of selected nursing skills prior to entering clinical placements. For more adequate evaluation, it will be necessary to develop another evaluation method for collecting information from clinical supervisors and faculty members. The further study is needed to develop effective teaching methods at the clinical laboratory in midwifery education.

【Keywords】 助産教育 midwifery education, 看護学士課程 undergraduate nursing education, 基礎看護技術 fundamental nursing skills, 母性看護技術 maternity nursing skills, 学内演習 clinical practicum at laboratory

はじめに

わが国の助産教育は、1948年に公布された保健婦助産婦看護婦法(現、保健師助産師看護師法)以降、看護教育を基盤として定められている。近年、看護系大学の増加に伴い、看護学士課程のなかに組み込まれた助産教育プログラム数も増加した。結果、この教育カリキュラムにおける助産学の講義・実習時間の不足、出生数低下などの影響による必要とする分娩介助実習症例数確保の困難、学生への過重な負担などが問題視されている。さらに、1996年のカリキュラム改正で、分娩介助の取り扱い実習が、従来の「10回以上」から「10回程度」へと変更されたことにより、助産師としての臨床実践能力の低下が懸念されている¹⁾。

2001年に公布された「保健婦助産婦看護婦法の一部を改正する法律」に対する附帯決議で、助産師教育については、学生が十分な出産介助実習が経験できるようその充実に努めることとされた。このように、より充実した助産教育のあり方についての議論が進むなか、わが国では2004年以降、従来の専門学校、短期大学部専攻科、および看護学士課程以外に、専門職大学院、大学院、大学専攻科が新設され、新しいカリキュラムによる助産教育が順次開始され、その多様化が進みつつあるところである。

現在、わが国の看護教育をめぐっては、疾病構造の変化、医療の高度化、安全に対する意識の向上などの医療環境の変化に伴って、臨床で期待される看護の役割も複雑化している。そのようななか、臨地実習における学生の看護技術実施の範囲や機会が限定されている傾向があり、そ

の習得状況への影響が懸念されている²⁾。看護教育における技術教育の重要性について議論が活発化するなか、2002年3月に文部科学省から出された「看護学教育の在り方に関する検討会報告」³⁾では、大学卒業者の看護実践能力の向上が必要であることが指摘され、看護実践能力育成における臨地実習の意義が明示された。そして、看護学士課程での看護実践能力の育成に欠くことのできない学習内容として、「看護基本技術の学習項目」が具体的に示された。2003年3月に公表された「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」²⁾では、臨地実習で学生が実施する看護基本技術を、予測される患者の身体侵襲の程度と教育的観点から、3つの水準に分類して示している。これらの指針に基づき、各看護教育機関において、学内演習、臨地実習前の評価、学生の安全対策など、技術教育の充実に向けた取り組みが進められているところである⁴⁾。

一方、助産教育における臨地実習でも、患者の安全意識の向上に加えて、出生数の減少、妊産婦の高年齢化や生殖補助技術の影響などによるハイリスク妊産婦の増加などによって、必要とされる正常分娩を十分に確保することが難しくなっている。さらに、看護学士課程の助産教育プログラムでは、短期間で核となる分娩介助を中心とした助産技術の習得を目指すうえで、助産学を学び始める学生の看護技術の習得不足による、助産学習への影響も懸念されている⁵⁾。わが国では、看護技術の能力は、助産教育の基盤であり、その後の助産技術の習得にとって重要な要素である。助産技術教育の充実のためには、学生の看護技術到達度の評価、あるいは助産教育課程における看護技術教育の必要性とその内容の検討をする必要があると考える。

しかし、分娩介助技術に関する学生の習熟度や実習での経験内容に関する調査や報告はあるが、助産教育と看護教育の看護技術教育との関連についての報告は少ない。佐藤ら⁶⁾は、短期大学部専攻科助産学専攻入学時の看護技術到達度と助産技術の到達度について、学生の自己評価による質問紙調査を実施した結果、相関関係は認められなかったと報告している。しかし、看護技術到達度と助産教育との関係について、自己評価以外の客観的な評価、および助産教育課程における看護技術教育に関する調査報告は見あたらなかった。

本研究では、看護学士課程の助産科目における看護技術演習の必要性について、学習者のニーズという側面から検討することを目的とし、助産科目を履修した学生(以下、学生)への質問紙調査の結果を考察した。この質問紙調査は、助産科目における助産および看護技術学内演習の評価の一環として実施したものである。本研究では、助産科目における基礎・母性看護技術の演習内容と技術評価試験(以下、技術チェック)の必要性、およびその演習時間の適切性について、また、看護技術の学内演習に関する学生の

ニーズについて示唆を得たので、結果を報告する。

・助産科目の学内演習で実施した看護技術演習の概要

1. 助産科目の学内演習の概要

今回調査対象となった看護学士課程(以下、A 学士課程)の助産科目における技術教育は、「助産診断・技術学Ⅱ(3単位 90時間)」で主に実施した。助産診断などの思考過程は、「助産診断・技術学Ⅰ(2単位 60時間)」で実施しているが、分娩時の異常や新生児蘇生の講義、および保健指導と集団指導の企画・運営に関する講義も、「助産診断・技術学Ⅱ」に含む。そのため、実際に学内実習室で技術演習を実施した時間は、オリエンテーションや技術チェックを含め、90時間中42時間であった(表1)。学内演習の実施期間は、2004年6月18日から8月25日であった。

2. 助産科目の学内演習における看護技術演習項目、時間、および技術チェック項目

学内演習の内容を検討するにあたり、まず、3年生までにすでに履修した看護技術で、助産学実習で学生が実施する可能性があり、その頻度が高いと思われた技術項目を抽出した。助産実習での実施頻度、特に、直接分娩介助や産婦へのケアにおいて実施頻度が高いと思われる技術のうち、対象への侵襲の可能性が高いと思われるものと、3年生までの臨地実習で実施頻度が低いと思われるもの、あるいは、実施から1年以上経過していると思われるものは優先的に、学内演習と技術チェックに組み入れた。その結果、バイタルサインの測定は、3年生までの臨地実習での実施頻度が高く、対象への侵襲の可能性が低いこと、そして母性看護技術は、臨地実習での実施から1年経過していないことから、「自己学習項目」とした。学生には、学内演習オリエンテーションで、各自の事前準備の必要性について説明し、演習室を利用しての自己学習を促した。表2は、選択した看護技術を、学習方法ごとに分類したものである。

・助産科目の学内演習における看護技術項目と演習時間の評価

1. 調査方法

2004年度に実施した助産科目における基礎・母性看護技術の演習内容と技術チェックの必要性および演習時間の適切性について、A 学士課程の助産科目を履修した学生全9名を対象に質問紙調査を実施した。調査期間は、2005年4月の最終週から2週間である。調査では、検討する技術項目を「分娩介助技術」「基礎看護技術」「母性看護技術」に分け、それぞれ演習項目と時間、チェック項目について必

表1 助産科目学内演習内容と時間数内訳

学習内容	時間数
1) 基礎看護技術	
① 基礎看護技術演習	4
② 基礎看護技術チェック	4
2) 分娩介助技術	
① 分娩介助手順, 演習オリエンテーション およびデモンストレーション	8
② 分娩介助技術演習	14
③ 分娩介助技術チェック	4
④ 分娩介助振り返り演習*	4
⑤ 分娩技術再チェック	4
合 計	42

*「分娩介助振り返り演習」では、③の技術チェックでの評価をふまえ、指導を受けた技術を重点的に演習した

表2 助産学実習に必要と思われる看護技術項目の演習方法による分類

分娩介助技術の一部として演習と技術チェックを実施	基礎看護技術として演習と技術チェックを実施	自己学習のみ
<ul style="list-style-type: none"> ・ガウンテクニックと滅菌手袋の装着 ・清潔(無菌)操作 ・滅菌物の取り扱い* 	<ul style="list-style-type: none"> ・導尿 ・浣腸 ・剃毛 ・注射薬の準備 ・血管確保・固定 ・輸液ポンプの使い方 	<ul style="list-style-type: none"> ・腹囲・子宮底長の測定 ・レオポルド触診法 ・分娩監視モニターの装着 ・腹部触診, 聴診の技術 ・バイタルサインの測定 ・外陰部の清潔(産褥期) ・新生児の沐浴

*演習のみ実施した項目

要性と適切性について質問した。質問紙は、助産教育に携わる2名の教員で作成した。質問項目、抽出した技術、測定尺度については、臨地実習修了後、学生の演習や臨地実習での実施状況を最終評価を考慮しながら検討し、作成した。今回調査した内容のうち、本論文では「基礎看護技術」と「母性看護技術」について報告する。

基礎看護技術については、演習・チェック項目設定の適切性、削除してもよいと思われる項目、追加すべき項目、演習時間の適切性について質問した。演習で実施すべき、あるいは削除したほうがよいと思われる項目については、複数回答可とした。選択した項目は、①〈導尿〉、②〈剃毛〉、③〈ガウンテクニックと滅菌手袋の装着〉、④〈清潔操作と滅菌物の取り扱い〉、⑤〈血管確保・固定〉、⑥〈注射薬の準備〉、⑦〈輸液ポンプの使い方〉、⑧〈浣腸〉で、追加すべき項目については別欄を設け、自由記載とした。項目設定と演習時間の適切性については、それぞれ5段階

で評価した。この項目についての5段階尺度は、①「適切(ほぼ100%)」、②「ほぼ適切(75~90%)」、③「半分くらい不適切(50~75%適切)」、④「半分以上不適切(25~50%適切)」、⑤「ほとんど不適切(25%以下適切)」, 時間については、①「適当」、②「現時間を100%として、75~90%まで短縮したほうがよい」、③「現時間を100%として、50~75%まで短縮したほうがよい」、④「現時間を100%として、25~50%まで短縮したほうがよい」、⑤「現時間を100%として、25%以下まで短縮したほうがよい」、である。項目設定と時間の適切性については、尺度だけでなく、理由や尺度に反映されない意見を記述できるよう、自由記載欄を設けた。

母性看護技術については、3年生の領域別実習(2003年11月中旬以降に実施)で実施しているため、すべて自己学習項目とした。そのため、演習あるいは技術チェックを実施したほうがよいと思われる技術について質問した。項目

表3 母性看護技術で、学内演習および技術チェックが「必要」とされた回答数と内訳(n = 9)

母性看護技術項目	学内演習	技術チェック
1. 腹囲・子宮底長の測定, レオポルド触診法	4	4
2. 分娩監視モニターの装着	3	3
3. 子宮復古の観察・悪露交換	1	3
4. 乳房ケア	7	5
5. 出生直後の新生児の観察とケア	7	5
6. 新生児の沐浴	4	5

として、①(腹囲・子宮底長の測定, レオポルド触診法), ②(分娩監視モニターの装着), ③(子宮復古の観察・悪露交換), ④(乳房ケア), ⑤(出生直後の新生児の観察とケア), ⑥(新生児の沐浴), ⑦(その他), の7項目を挙げた。〈その他〉の項目には, その内容を記載できるようにした。また, 必要と思われる理由や意見についての自由記載欄を併せて設けた。

2. 倫理的配慮

調査目的と調査情報使用目的, 守秘義務と匿名性の厳守, 調査への参加が自由意思であること, を文書で説明し, 調査用紙は, 無記名で, 配布・回収とも郵送で行った。

. 結果

1. 質問紙の回収率

回答済みの質問紙は, 調査対象の全9名から回収された(回収率100%)。回収された質問紙のうち, 分析の過程で除外されたものはなかった。

2. 基礎看護技術演習の必要性および項目設定と時間の適切性

演習あるいは技術チェックを実施した基礎看護技術が「適切」と答えた学生は, 9名中8名であった。1名が「半分くらい不適切(50~75%適切)」と回答したが, その理由や改善点などの記載はなかった。削除したほうがよい技術の有無については, 「特にない」「すべて必要」と回答した学生が2名いた。「必要ない」と回答のあった技術については, 1名が(剃毛)(理由の記載なし), ほかに1名が(血管確保・固定)〈注射液の準備〉〈輸液ポンプの使い方〉を挙げており, その理由は, 「実習で実施しないから」であった。〈導尿〉〈ガウンテクニックと滅菌手袋の装着〉〈清潔操作と滅菌物の取り扱い〉〈浣腸〉について, 「削除したほうがよい」と答えた学生はいなかった。基礎看護技術で, 技術チェックを必要とする技術項目として, 「〈導尿〉〈剃毛〉

〈血管確保・固定〉〈輸液ポンプの使い方〉〈浣腸〉は特に重点をおいて同様に続けてほしい」と回答した者が1名いた。その理由として, 「基礎看護学で演習をしてからかなり時間が経過しており, 基礎実習で実施できなかった技術であるが, 助産では頻回に実施するため」と記述していた。演習に追加したほうがよい技術項目として, 1名が〈中央配管の使い方〉〈酸素吸入や吸引器のセット方法〉, ほかに1名が〈体位変換〉を挙げていた。

基礎技術演習に要した時間について, 「適当」と答えた学生は9名中7名, 「現時間を100%として, 50~75%まで短縮したほうがよい」と答えた学生は1名, 「増やしたほうがよい」と答えた学生は1名であった。「短縮したほうがよい」の理由は, 「分娩介助のほうにもっと時間を回したかった」であった。「適当」のなかで, 「時間が許すなら, もっと長いほうがよいと思うが, 基礎看護の授業でもっと練習しておくべき項目だとも思う」という記述が1件あった。

3. 母性看護技術演習と技術チェックの必要性

2004年度は, 母性看護技術の演習と技術チェックについては, 授業時間内では設定しなかった。学生に, 演習の必要性について質問したところ, 9名中7名が「ある」と回答した。具体的な技術項目については, (腹囲・子宮底長の測定, レオポルド触診法)4名, (分娩監視モニターの装着)3名, (子宮復古の観察・悪露交換)1名, (乳房ケア)7名, (出生直後の新生児の観察とケア)7名, (新生児の沐浴)4名であった(表3)。〈その他〉としては, 〈インファントウォーマーの使い方〉〈授乳の介助方法〉が挙げられた。

技術チェックの必要性については, 「時間がとれるならすべてやったほうがよいと思う」と回答した学生が1名であったが, 技術項目別にみると, (腹囲・子宮底長の測定, レオポルド触診法)4名, (分娩監視モニターの装着)3名, (子宮復古の観察・悪露交換)3名, (乳房ケア)5名, (出生直後の新生児の観察とケア)5名, (新生児の沐浴)5名であった(表3)。自由記載で, 「技術チェックまでは必要ないと思う。経験することだけで, ある程度安心できる」

という記述が1件あった。

母性看護技術項目で、自由記載が最も多かったのは、〈乳房ケア〉に関するもので、4名から計5件の回答があった。1件は、「臨床では授業で取り上げた方法と異なるケアを実施していたので、ほかの方法も学習しなかった」というもので、あとの4件はすべて、この項目の演習あるいは技術チェックの必要性について述べたものであった。その理由は、「実習で母乳哺育の援助を実施する場面が多かったが、自身の知識や技術が不足していたため、十分な援助ができなかった」というものであった。

次に記載が多かったのは、〈出生直後の新生児の観察とケア〉で、記載数は3件であった。この項目の演習あるいは技術チェックが必要な理由は3件とも、「実際に間接介助で実施したときに、自己学習のみでは準備が不十分と感じたため」であった。〈分娩監視モニター〉については、2名の学生が、装着と判読について、演習や技術チェックの必要性を述べている。

そのほか、理論と技術の統合に関する学習機会に関して、「観察技術からそのアセスメント(方法)まで、もっとふみこんだ講義、チェック、演習があればよかったと思う」というものと、「(分娩後の全身状態と子宮復古の観察は、)帰室時間を予測するときにかかわる項目だと思う。事例を用いて皆で検討する時間があってもいいのでは」の、2件の記述があった。

・ 考 察

1. 助産科目における基礎看護技術の学内演習と技術チェックの必要性

助産科目履修2004年度の基礎看護技術学内演習では、〈導尿〉〈浣腸〉〈剃毛〉〈ガウンテクニックと滅菌手袋の装着〉〈清潔(無菌)操作〉〈注射薬の準備〉〈血管確保・固定〉〈輸液ポンプの使い方〉について、演習と技術チェックを実施し、〈滅菌物の取り扱い〉については演習のみ実施した。これらの項目については、9名中8名が「適切」と回答しており、調査の結果から、ほぼ学生のニーズに即したものであったと考える。

「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」²⁾が公表された後、この報告書に基づいた各教育機関における技術教育の実態に関する調査結果が報告されている。今回、A学士課程で演習および技術チェックに挙げた技術項目のうち、河野ら⁷⁾は、看護系教員を対象とした臨地実習での学習状況について調査した結果、〈浣腸〉〈導尿〉〈静脈内注射の方法〉〈点滴静脈内注射の管理〉〈無菌操作〉を「習得が困難な技術項目」として報告している。小林⁸⁾は、卒業間近の学生の看護技術習得頻度と自信度の関係について調査した結果、「実施回数が多いが自信レベ

ルが低いパターン」の技術として、〈滅菌物受け渡し〉〈滅菌包みを開く〉〈ガウンテクニック〉を、そして、「実施回数が少なく自信レベルも低いパターン」の技術として、〈浣腸〉〈導尿〉〈点滴静脈内注射時の管理〉を挙げている。このことから、今回得られた学生の演習や技術チェックについてのニーズと、これらの報告内容との関連性が想定できる。

1名が、「実習で実施しない」という理由で、〈注射薬の準備〉〈血管確保・固定〉〈輸液ポンプの使い方〉を削除してもよい項目としていた。これらの技術のうち、臨地実習で学生が実施する主な技術は、分娩介助の準備における、局所麻酔薬やシリンジ、注射針の準備である。輸液ポンプの管理や血管確保・固定については、見学か観察のみの実施としている。しかし最近では、無痛分娩の増加などの影響もあり、分娩誘発や促進で輸液ポンプを使用している産婦を受け持つ機会は少なくない。また、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」²⁾では、〈点滴静脈内注射〉〈静脈内注射の方法〉〈輸液ポンプの操作〉が、水準2の「教員や看護師の指導・監視のもとで学生が実施できるもの」に含まれている。分娩の経過を診断するうえで、対象への処置や管理状態の把握は必須であり、臨床で助産師が実施している技術は、可能な範囲で学習する必要があると思われる。そのため、今後、臨地実習での学習方法とその調整の必要性について検討していく必要がある。

また、理由は記載されていなかったが、「〈剃毛〉を削除してもよい」と回答した学生が1名いた。現在では、分娩時に外陰部の半剃毛を実施することは少なくなっているが、実施の可能性がある技術である。剃刀を他人の皮膚、しかも分娩中の産婦の外陰部に当てるのは、危険を伴う技術である。実施頻度と対象への安全性を考慮し、今後教員や臨床など、ほかの立場からの意見もふまえながら、学内演習での実施の必要性を検討していく必要があると考える。また実施する場合、演習では、外陰部モデルとゴム風船を用いて、剃刀の持ち方、動かし方を中心に実施したが、より現実に近づけた演習ができるよう、使用物品の工夫などを含めた演習方法の検討が必要である。

「基礎看護技術の演習項目として追加したほうがよい」として、〈体位変換〉と記載した学生が1名いた。理由の記述がないため詳細は不明であるが、助産の分野で体位変換を援助する場面としては、分娩期にある産婦のポジショニングや移動などが考えられる。そのため、〈体位変換〉については、基礎看護技術ではなく、分娩1期の助産ケアとして授業でとりあげることを検討する。そのほか、〈中央配管の使い方〉〈酸素吸入や吸引器のセット方法〉と記載した学生が1名であった。これについては、次項で述べる。

基礎看護技術演習の時間配分については、9名中7名が

「適当」と回答しており、ほぼ適切であったと考えられる。しかし、「増やしたほうがよい」、あるいは「可能なら増やしたほうがよい」と答えた学生が2名いたことから、助産に必要な基礎看護技術を演習や技術チェックで学習することに対する学生のニーズの高さが明らかになった。「分娩介助技術演習に時間を回してほしい」という理由で、「基礎看護技術の時間を減らしたほうがよい」という意見はあったが、「必要ない」という理由での時間短縮を求める意見はなかった。必要な技術演習が適切な内容と時間配分で実施できるよう、助産技術演習全体の時間数と時間配分を考慮することだけでなく、自己学習課題の提示など、助産科目のカリキュラム全体をとおして必要な技術が習得できるような教授方法を工夫する必要がある。

また今回、質問紙の尺度に演習時間の延長に関する尺度を含んでいなかったため、時間の延長が必要と感じている学生の意見が反映されにくかったことも考えられる。質問紙の尺度について、今後さらに検討し、必要な修正を加える必要がある。

2. 助産科目における母性看護技術の学内演習と技術チェックの必要性

母性看護技術については、3年生の領域別実習で実施しているため、助産の学内演習では実施せず、すべて自己学習項目としていた。しかし、学生9名中7名が演習あるいはチェックの必要が「ある」と回答した。また、演習と技術チェックが必要と思われる母性看護技術項目として、〈腹囲・子宮底長の測定、レオポルド触診法〉〈分娩監視モニターの装着〉〈子宮復古の観察・悪露交換〉〈乳房ケア〉〈出生直後の新生児の観察とケア〉〈新生児の沐浴〉の6項目を挙げたが、演習が必要と思われる項目としての〈子宮復古の観察・悪露交換〉以外は、すべての項目で複数名の学生が「必要」と回答している(表3)。以上の結果から、母性看護技術の演習・技術チェックに対する学生のニーズの高さが明らかに示された。母性看護技術は、助産実習で必ず実施する項目であり、また、同じ技術であっても、期待される実施レベルは母性看護実習よりも複雑である。特に、褥婦、出生直後の新生児の健康状態、分娩進行中の胎児や陣痛の状態など、状況判断や助産診断が必要な技術についてのニーズが高かった。

実施技術に関連する理論や思考過程については、講義で知識の確認を行っていたが、技術演習での確認も必要であったと考えられる。特に、〈乳房ケア〉については、4名の学生が、「講義でとりあげるだけでなく、より具体的な内容の授業および演習が必要」と回答した。乳房ケアは、産褥期の母児のケアでは重要な部分で、学生がかかわる場面も多い。ただし、その手技や保健指導の実際に関する学術的な文献は少なく、施設間、個々の助産師の間でも多様

な特徴が認められる技術であり、母児の状態についての高度な診断能力を要求される分野でもある。乳房ケア、あるいは母乳育児に関する援助については、学内の教育内容だけではなく、臨地実習での学生の学習方法についてさらに検討し、現実に即したかたちで、学生が積極的に学習できる方法を考える必要がある。

そのほか、必要な母性看護技術項目として、〈インフュージョンポンプの使い方〉、また、前項で述べた〈中央配管の使い方〉〈酸素吸入や吸引器のセット方法〉を自由記載で挙げていた学生が1名いた。これらの項目は、分娩介助技術演習に含んで学習されたものであるが、新たに演習あるいは技術チェックを実施するか、検討が必要である。

3. 理論と技術の統合について

2名の学生が、技術と思考過程を統合するような学習の機会を求める記述をしていた。2004年度における助産診断学と助産技術学の授業構成については、理論と技術の統合が不十分であったことが示唆された。技術チェックにおいても、手技に重点をおいた評価で、観察やアセスメント技術は一般的な知識の範囲にとどめていたが、さらに応用的な演習内容が必要であったことが指摘された。臨床では、技術は観察やアセスメントと同時に実施される。今後、事例や観察、アセスメントを含めた学内演習など、思考過程と実施技術を統合するような学習機会を設定できるよう、検討していく必要がある。

4. この調査の限界と課題

この調査は、A学士課程助産科目の、学内演習における教育活動の評価の一部として実施したものであり、調査対象数や範囲は、限局されたものである。そのため、この結果の利用範囲は、慎重に検討されなくてはならない。さらに今回の評価は、学生の立場からの意見に基づいたものであり、学生の技術能力の到達度に関する客観的な評価や教育に携わった立場からの意見は反映されていない。より客観的なデータに基づいた演習内容の整備のため、今後、他者の意見も含めた評価方法を検討していく必要がある。

また今回の評価は、助産教育における看護技術演習の必要性と、その設定項目と時間の適切性についてのみ限定しており、具体的な教授方法についての検討を含んでいない。技術教育に関する報告書の公表以降、その教育内容の充実に向けて、今後、技術教育の実態を含め、教授方法の検討も活発に実施されることが予測される。2003年に公表された、「新たな看護のあり方に関する検討会報告書」⁹⁾では、望ましい看護のあり方の普及に向けて、技術教育の充実を図るとともに、看護基礎教育における変化の可能性も示唆されている。今後明らかになるであろう新しい助産学カリキュラムによる助産教育の実態報告、今後の看護・

助産教育の動向をふまえながら、助産教育における基礎・母性看護技術の教授内容や方法を検討していく必要があると考える。

・ 結 論

A 学士課程の助産科目を履修した学生の立場から、助産科目においても、看護技術の演習あるいは技術チェック実施の必要性が示唆された。基礎看護技術については、今回調査した、助産で実施する可能性があり、対象への侵襲の可能性が高い技術のほとんどについて、演習、技術チェックとも実施する必要がある。母性看護技術については、対象の健康状態や分娩進行状態の助産診断能力に直接かかわる技術についての学習ニーズが高かった。乳房ケアなど、客観的な指導方法の文献が少ない技術項目については、臨床の状況をふまえて教育内容を検討する必要がある。また、事例の活用など、理論や思考過程と技術を統合するような演習方法の工夫の必要性が示唆された。

今後、この結果をふまえて学内演習の内容を検討するとともに、看護および助産教育における技術教育の動向をふまえ、さらに、教育の立場からの評価を含め、助産教育における基礎・母性看護技術の学内演習およびその教授方法についての検討を実施する必要がある。

文 献

- 1) 江幡芳枝：実態調査からみた助産師技術教育の問題

点、助産雑誌，58(3)，22-28，2004.

- 2) 厚生労働省医政局看護課看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，2003.
- 3) 文部科学省看護学教育の在り方に関する検討会：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて—看護学教育の在り方に関する検討会報告，2002.
- 4) 正木治恵：「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書をめぐって，看護展望，28(7)，50-55，2003.
- 5) 我部山キヨ子：助産学教育における技術教育の現状と将来的展望，助産雑誌，58(3)，15-20，2004.
- 6) 佐藤恵美，小木曾みよ子，加藤高枝：専攻科助産学専攻1年間における助産技術の到達度—入学時看護技術到達度との関連，名古屋市立大学看護短期大学部紀要，6，47-57，1994.
- 7) 河野保子，乗松貞子，野本ひさ，中村慶子，赤松公子，松本葉子，中島紀子：看護技術項目の効果的な教育展開とは—技術教育の実態調査から(第1報)，看護展望，30(1)，80-85，2005.
- 8) 小林たつ子：臨地実習での学生の技術体験実施頻度と自信度から考える看護技術教育，看護教員と実習指導者，2(2)，4-13，2005.
- 9) 厚生労働省医政局看護課新たな看護のあり方に関する検討会：新たな看護のあり方に関する検討会報告

【要旨】 看護教育における学生の臨地実習の範囲や実施機会が制限される傾向にあるなか、不十分な看護臨地実習経験による助産技術の学習過程への影響が懸念されている。本研究の目的は、学習者のニーズという側面から、看護学士課程の助産科目履修における看護技術の学内演習の必要性を検討することである。検討は、A看護学士課程において、助産科目を履修した学生全9名に対する質問紙調査をもとに実施した。調査期間は、2005年4月の最終週から2週間で、質問紙は、配布・回収とも郵送で行った。対象者には、学内演習で実施した演習項目と時間、技術評価試験(以下、技術チェック)項目について、5段階尺度と自由記載による評価を依頼した。学内演習および技術チェックを実施した基礎看護技術項目は、〈導尿〉〈剃毛〉〈ガウンテクニックと滅菌手袋の装着〉〈清潔操作と滅菌物の取り扱い〉〈血管確保・固定〉〈注射薬の準備〉〈輸液ポンプの使い方〉〈洗腸〉で、9名中8名が項目設定を「適切」、演習時間については、7名が「適切」と回答した。母性看護技術項目については、〈腹囲・子宮底長の測定、レオボルド触診法〉〈分娩監視モニターの装着〉〈子宮復古の観察・悪露交換〉〈乳房ケア〉〈出生直後の新生児の観察とケア〉〈新生児の沐浴〉のうち、1つを除いたすべての項目に対して、複数名が演習は「必要」と回答した。そのほか、事例検討など、理論と技術の統合を促すような演習の機会を求める意見があった。調査の結果、学生の立場から考える助産科目における基礎・母性看護技術の学内演習の必要性が示された。この調査結果をふまえた学内演習の充実を図るとともに、今後、看護および助産教育における技術教育の動向をふまえ、教育の立場からの学内演習の評価や、その教授方法についても検討する必要がある。
